エックハルトの秘蹟論

中山善樹

I 序論

従来、エックハルト研究においては奇妙なことには、「秘蹟」(sacramentum) の問題については殆ど言及されることがなかった。それどころか、エックハルトにおける秘蹟の問題に言及した数少ない研究者であるエーベリンク (H. Ebeling) は、エックハルトのドイツ語著作の重要な主題である「魂における神の誕生」(Gottesgeburt in der Seele) は明らかに秘蹟にとって代わるものであると断定している(1)。

ところでキリスト教において、「秘蹟」とは、人間に不可視的な恩寵を被らしめるために、イエス・キリストの制定した可視的な徴であるとされている。それらは古来、七つあるとされており、それぞれ洗礼、堅信、聖体、改悛、終油、叙階、婚姻の秘蹟である。なかでも「聖体」(eucharistia) の秘蹟は重要なものと見なされ、とりわけ中世においては、さまざまな思想家の真摯な思索の対象となった。というのは、この秘蹟はキリストの臨在と密接に連関しているからである。

したがって、上に述べたようなエックハルト研究における「秘蹟」に対する否定的評価ないしは無視の態度は、一見して極めて不自然な体を呈しており、エックハルトの師であるアルベルトゥス・マグヌスが著名な『秘蹟論』(De sacramentis) を著しており、アルベルトゥス研究において秘蹟の問題が極めて重要な一分野となっているのと好対照をなしている。

実際、中世のキリスト教思想に親しんでいる者にとっては、エックハルトがオリゲネス、ニッサのグレゴリウスから継承したとされている前述の「魂における神の誕生」の主題は、エーベリンクの言うように、けっして秘蹟にとって代わるものではなく、むしろ秘蹟の持つ深い思想的意味を表すもののように思えるのである。私には、エックハルトはけっして秘蹟を看過していたのではなく、かえって秘蹟の持つ重大な意味を自らの思想の中心に据えていたように思われる。そこで本論では、エックハルトの秘蹟論について若干論じることにしたい。

エックハルトはそのラテン語著作において、秘蹟、とりわけ聖体の秘蹟について、およそ三箇所において、主題的に取り扱っている。それらのうち二箇所は、エックハルトの若年時代に由来する『命題集へのコラチオ』(Collatio in Libros Sententiarum) と『一二九四年にパリで行われた復活祭説教』(Sermo Paschalis a. 1294 Parisius habitus) であり、最後の一つは、おそらくエックハルトの晩年に行われたと推定される『聖体の祝日において』(In Sollemnitate Corporis Christi) と題されているラテン語説教である。この説教は現行のシュトゥットガルト版批判的校訂版全集ラテン語著作第Ⅳ巻に載録されている(2)。

前二者については、拙著『エックハルト研究序説』で詳しく取り扱ったので、ここでは、従来のエックハルト研究において殆ど採り上げられることのなかった最後のラテン語説教におけるエックハルトの秘蹟論について論ずること

にしたい。その際、論究はエックハルトの言説の意味を敷衍的に解説するという仕方で進めることにする。そのことによって論究は、未完成の草稿であるとされているこの説教が本来的に意味しているものを、なしうるかぎり明確にすることを目指している。

Ⅱ　聖体の秘蹟の身体性

まず説教の冒頭には、「私の肉は真の食べ物である」(Caro mea vere est cibus)(ヨハ、6・56)という聖句が掲げられ、それについてのトマスの解釈に依拠することによって、聖体の秘蹟の思想的意味を明らかにすることが試みられる。その際に注目されているのは、聖体の秘蹟の有する「身体性」(corporeitas)の意味である。聖体の秘蹟を解釈するに際しての困難は、その「身体性」のうちに伏在しているからである。

エックハルトは、まず聖句のうちの「私の肉」(caro mea)という言葉に注目する。言うまでもなく、ここで言われている「私の肉」とは、キリストの「身体」(corpus)を意味する。しかし、キリストの身体が真の食べ物であるとは、何を意味するのであろうか。この場合のキリストの身体とは、単に歴史上の人物としてのイエス・キリストの身体のことを意味するのみではなく、祭壇の上における聖体の秘蹟としてのキリストの身体をも指している。それでは、聖体の秘蹟としてのキリストの身体をエックハルトはどのように解釈しているであろうか。

エックハルトによれば、キリストの身体は、祭壇の上においては、「場所的に」(localiter)あるのではなく、「秘蹟的に」(sacramentaliter)あるのである(3)。ここでは、聖体の秘蹟としてのキリストの身体に対して、場所的にあるこ

とが否定されており、そのことが直ちに秘蹟的にあることであるとされている。

それでは、聖体の秘蹟としてはキリストの身体は場所的にあるのではない、とは何を意味しているのであろうか。聖体の秘蹟においては、司祭を通してのキリストの言葉という「形相」(forma) によって、パンがキリストの身体へと変容するとされているのであるが、エックハルトによれば、秘蹟の力によるその変容は、言葉が意味することを生じせしめる、言葉の形相にしたがって、キリストの身体のうちへと遂行されるのであって、「量」(quantitas) のうちへと遂行されるのではない(4)。秘蹟としてのキリストの身体は「実体」(substantia) ではあるが、量を持たないのであり、したがってまずこの意味において、場所的にあるのではないのである。すなわち、エックハルトによれば、キリストの身体の実体は、或る仕方で、場所的に関係しているということはないのであり、場所ないし場所的にあるものの法則の或る属性を持つことはないのである(5)。キリストの身体は、それの本来の固有な場所であるただ一つの場所、すなわち天において以外に、場所のうちにあるものとしてあるのではない。キリストの身体は天とは異なる他の場所においては、例えば祭壇の上においては、確かにそれは真の意味においてキリストの身体であり、しかも実体的にそうなのであるが、しかしながらそれは場所的にあるのではないのである。それは「付帯的にのみ」(per accidens) 場所のうちにあるのであり、すなわちパンと葡萄酒というその形象の場所のうちにあるのである。そしてこのような仕方でキリストの身体の実体が、量を持たず、場所的にあるのではなく、単に付帯的にのみ場所的にあるというその存在様態をエックハルトは「秘蹟的に」と呼んでいるのである。

ここでは明らかに「身体性」や「実体」についてのわれわれの常識的理解を超える把握が示されている。聖体の秘蹟におけるキリストの身体は場所的にはなく、量を持たないと言われているからである。しかもキリストの身体の

「実体」がそうなのであるという。われわれはまずこの点に留意すべきであろう。

Ⅲ　聖体拝領の心構え

次にエックハルトは「これは天から降ってくるパンである」(Hic est panis de caelo descendens)(ヨハ、6・50)という聖句を引用して、トマスに依拠して、以下のように解釈する。まずエックハルトが注目していることは、キリストの身体をそれに「ふさわしい仕方で食べ、飲むことのない人々」(qui manducat et bibit indigne)(1コリ、11・29)と警告されているように、聖体の秘蹟は、それにふさわしい仕方で拝領することを要請するものであるということである。すなわち、エックハルトによれば、聖体の秘蹟は、次のような根本的に異なる二つの仕方で採られることができる。一つは、聖体が徴であるかぎりにおいてであり、すなわちその意味が理解されることなく、単に食料としてのみ採られる場合であり、このことによっては、霊的ないし身体的死は取り去れることはない(6)。それに対してもう一つは、その可視的食料が採られ、それが霊的なものとして理解され、霊的に味わわれ、かくて霊的にそれが満足させるような仕方で採られる場合である(7)。そのような仕方で、聖体を霊的に食べる人々は、すなわち罪なくして食べる人々は、今や霊的に生きるのであり、身体的にも永遠に生きるのである。というのは、このパンはそれ自身のうちにそれの像であるところのもの、キリストを含んでいるからである。

それでは、聖体の秘蹟において、キリストを摂取するとはどういうことであろうか。エックハルトによれば、キリストを信仰する者は、キリストを自分自身のうちに摂取するのである。聖句にも、次のように言われている。「キリ

ストは信仰によってあなたがたの心のうちに住む」(habitare Christum per fidem in cordibus vestris)(エフェ、3・17)。それゆえに、もしキリストを信仰する者が生命を持つならば、その人は、このパンを食べることによって生気づけられるのである。それゆえに、このパンは生命のパンである。

しかしキリストを信仰するとはいかなる事態をいうのであろうか。エックハルトによれば、信仰は神愛(caritas)によって形成されるのであり、神愛はただ単に知性を完全なものにするだけではなく、感情をもまた完全なものにするのである[8]。というのは、もしそれが愛されることがなければ、その信仰されるものへと信仰する人が向かわされることもないからである。このようにして人は神愛によって形成される信仰によって、永遠の生命を持つようになるのである。さらに詳しく言うと、エックハルトによれば、キリストは、われわれのうちにおいて、二様の仕方で存在する、すなわち信仰であるかぎりでの信仰によって知性のうちに、かつ信仰を形成する神愛によって感情のうちに[9]。かくてキリストを信仰する者は、キリストのほうへと向くのであり、キリストを感情のうちに、かつ知性のうちに持つようになるのである。聖句において言われているように、「キリストは永遠の生命である」(hic est vita aeterna)(1ヨハ、5・20)ならば、キリストを信仰する人は誰しも永遠の生命を持つのであり、この地上においては、原因において、かつ希望において、いつか現実にそれを有するであろう者として持つのである。言うまでもなく、物体的パンは、このような仕方で永遠に生気づけるということはない。というのは、それはそれ自身のうちに生命を持っていないからであり、生けるものの力によって、栄養に変化し、転化したものとして生気づけるからである。

エックハルトによれば、キリストの力は永遠の生命を与えることのうちにある[10]。それゆえにキリストは次のよう

に言っている。「もし誰かがこのパンを食したならば」、すなわち霊的に、ということであるが、その人は「生きるであろう」、しかもただ単に信仰と義によって現在、生きるのではなく、「永遠に」生きるのである、と。それゆえに、聖句においても次のように言われている。「すべての生きて、我を信じる人は、永遠に死ぬことはない」(omnis qui vivit et credit in me, non morietur in aeternum)(ヨハ、11・26)。

このようにキリストは、自分が生けるパンであると言っているのであるが、このことがキリストに属するのは、エックハルトによれば、キリストが言葉であるかぎりにおいて、ないしは魂のみであるかぎりにおいてであるというように誤解されないために、彼の身体もまた、生気づけるものであることを明らかにしているのである(11)。すなわち、キリストの身体はキリスト自身の神性の道具である。それゆえに、キリストの神性が生気づけるものであるように、道具は働く者の力によって働くのであるから、それと同じく、ダマスケヌス(12)によれば、肉も、それに付着する言葉の力によって生気づけるのである。

Ⅳ　聖体の秘蹟に対する四つの観点

エックハルトによれば、以上に述べられたすべての意味において、聖体の秘蹟とはキリストの身体との交わりの秘蹟に他ならないのであるが、以上に述べられたことを前提にして、次にエックハルトは、聖体の秘蹟を四つの観点から、すなわちその形態、それを打ち立てた者の権威、その真理性、その有用性の観点から考察する。

まず第一に、聖体の秘蹟の形態について。この秘蹟の形態は確かにパンである。その理由は、これがキリストの身

体の秘蹟であるからである。しかしキリストの身体は教会であり、その教会は、多くの信徒からなる身体の統一性のうちに聳えているのである。それゆえに、それは教会の統一性の秘蹟である。聖句にも、「われわれは皆、一つの身体である」(omnes unum corpus)(ロマ、12・5)と言われている。それゆえに、パンはさまざまな穀粒から仕上げられるのであるから、それはこの秘蹟にふさわしい形態であると言われる。

第二に、聖体の秘蹟を打ち立てた者の権威について。この秘蹟の保証人はキリストである。というのは、この秘蹟においては、司祭が捧げるとはいえ、キリスト自身が秘蹟に力を与えるからである。というのは、司祭はキリストの人称において捧げるのであり、他の秘蹟においては、司祭は教会の言葉を用いるが、この秘蹟においては、キリストの言葉を用いるからである。というのは、キリストは、自分自身の身体を、自分自身の意志によって、死へと引き渡したのであるが、このようにまた、キリストは自分自身の力によって、自分自身を食べ物へと与えるのである。それゆえに、聖句においても、「彼はパンを採った」(accipiens panem)(マタ、26・26)と言われている。この秘蹟は途上における扶養のための食べ物として制定されているのではなく、祖国、すなわち天国における至福のための食べ物として制定されているのであると言われている。

第三に、聖体の秘蹟の真理性について。この秘蹟の真理性は、キリストが「これは私の肉である」と言うときに、示唆されている。キリストは、これは私の肉を意味すると言っているのではなく、「これは私の肉である」と言っているのである。聖体の秘蹟は単にキリストの身体の象徴ではない。それは「現実に」キリストの身体そのものなのである。すなわち、エックハルトによれば、この神秘に満ちた秘蹟においては、キリストが全体として、真実において含まれているのである。そこでは身体は「転化」(conversio)の力によってあるのであり、それに対して、その神性

と霊魂は、自然的な「随伴」(concomitantia) によってあるのである[14]。キリストにおいて、その神性はその身体と不可分な形で結合しているのである。キリストがここで「肉」(caro) と言っているのは、この秘蹟は、キリストの受難の記念であるからであり、それは次の聖句によって示されている。「あなたがたがこのパンを食べ、杯を飲む度に、主の死を告げ知らせよ」(quotienscumque manducabitis panem hunc et calicem bibetis, mortem domini annuntiabitis) (1コリ、11・26)。キリストの受難はその弱さのうちにあり、それによって彼が死んだその弱さを示唆するために、主は「これは私の肉である」と言ったのである。というのは、「肉」という名詞は弱さを示すからである。

最後に、聖体の秘蹟の有用性について。この秘蹟の有用性は大なるものであり、普遍的なものである。というのは、それは、われわれのうちに、今、霊的な「生命」(vita) を齎すのであり、最後には、永遠の「生命」を齎すのであって、それはすでに言われた通りである。それゆえに明らかなことは、キリストが死することによって成就した死の破壊と、キリストが蘇ることによって齎す生命の再生とが、この秘蹟の齎す働きであるということである。さらにこの秘蹟の有用性は普遍的なものである。というのは、この秘蹟においては、ただ単に司祭のみが、その働きを得るのではなく、そのために彼が祈っている人々も、それどころか死せる人々も、生ける人々も含んだすべての教会が、その働きを得るのである。というのは、この秘蹟のうちには、すべての秘蹟の普遍的原因、すなわちキリストが含まれているからである。すでに言われたように、聖体の秘蹟におけるキリストの身体は実体における物体であるが、量的なものではないから、それによって注目しなければならないことは、聖体の秘蹟におけるキリストの身体に対しては、いかなる人も、場所的にも、時間的にも、遠ざかっていないということである。それゆえに、われわれがミサにおいて祈るすべての人々が現前しているものとして表象されるべきである。すなわち、エックハルトによれば、聖体

の秘蹟においてキリストの身体と結びつくということは、場所と時間とを超えて生じることであり、したがってこの世の外側で生じることなのである[15]。

V　信仰と知解

以上のようにして、このラテン語説教においては、エックハルトは聖体の秘蹟の「信仰」(fides) をなしうるかぎり「知解」(intellectus) することを試みている。そしてこの「知解」によって、この「信仰」はいっそうその内容において豊かになり、揺るぎないものとなる。そしてこのことこそ、エックハルトがこの説教において本来的に目指していたものであった。反対に、この「知解」はこの「信仰」の光りに照らされ、それによって導かれている。ここでは「信仰」と「知解」は截然と分かたれることなく、いわばその統一態が現成している。そしてそれこそは、本来、盲信ではありえないキリスト信仰の採るべき殆ど唯一の形態であると言えよう。

このことを換言すれば、ここでは、神学は哲学によって、よりいっそう普遍的な思惟の次元にまで高められていると同時に、哲学も神学によって、独力では到底到達しえないような深遠な思惟対象へと導かれているのである。ここでは、神学と哲学は協調しており、いわばその綜合がもくろまれているのである。そのことによって、思惟はその厳密性を保持しつつ、独力によっては到達しえない魂の内奥の深遠な次元まで貫入することが可能になるのである。そしてこれこそが、ラテン・アヴェロエス主義の影響によって、神学と哲学が急速に分離し始めた一四世紀初頭の西欧にあって、エックハルトがマイモニデスに範を求め、達成しようとした学的構想であったと言うことができよう[16]。

注

(1) Heinrich Ebeling: Meister Eckharts Mystik. Studien zu den Geisteskampfen um die Wende des 13. Jahrhunderts, Stuttgart 1941, S. 176.
なお、エーベリンクは本書の随所において、エックハルトが「超秘蹟的」(transsakramental) 傾向を有していることを指摘している。

(2) 使用テクストは次のとおりである。Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, herausgegeben im Autrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Die lateinischen Werke, Bd. IV, Magistri Echardi Sermones, herausgegeben und übersetzt von E. Benz, B. Decker und J. Koch, Stuttgart 1956, S. 33–49 (略号、LW IV.).

(3) LW IV., n. 31: corpus Christi non est in altari localiter, sed sacramentaliter.

(4) LW IV., n. 32: conversio vi sacramenti iuxta formam verborum, quae efficiunt, quod significant, fit in corpus Christi, non in quantitatem.

(5) Ibid., Corporis autem substantia non respicit aliquo modo locum nec per consequens sortitur alquam proprietatem ex legibus loci seu locati.

(6) LW IV., n. 37: vel quantum ad signum tantum, id est ut cibus tantum non intellecto significato; sed per hoc non tollitur mors spiritualis seu corporalis.

(7) Ibid., ita sumatur cibus visibilis, ut intelligatur spiritualis, spiritualiter gustetur, ut spiritualiter satiet.

(8) LW IV., n. 38: fide scilicet formata, quae non solum perficit intellectum, sed etiam affectum.

(9) Ibid., Christus autem est in nobis dupliciter, scilicet in intellectu per fidem, in quantum est fides, et in affectu per caritatem, quae informat fidem.

(10) LW IV., n. 44: Virtus autem eius est dare vitam aeternam.

(11) LW IV., n. 45: Et ne intelligatur quod hoc ei esset, in quantum est verbum vel secundum animam tantum, ideo ostendit quod etiam caro sua vivificativa est.

(12) lohannes Damascenus, De fide orthodoxa III c. 17, PG 94, 1069.

(13) LW IV., n. 45 : . . . ad communionem sui corporis, scilicet ad eucharistiae sacramentum.

(14) LW IV., n. 48 : corpus est ibi ex vi conversionis, divinitas vero et anima per naturalem concomitantiam.

(15) LW IV., n. 51 : illi corpori uniri est super locum et tempus fieri et per consequens extra hunc mundum.

(16) なお、本論は拙論「エックハルトと秘蹟の問題」（『創文』三五〇号、六一―一〇頁）の論旨をさらに詳細に展開したものである。